

【主題】 地域や関係機関と連携した、安全・安心な学校づくり、地域づくりの実践

【副題】 ～意図的に生徒に出番・役割・承認を与える場の工夫を通して～

【学校・団体名】 宮城県東松島市立矢本第二中学校

【役職名・氏名】 校長 黒沼 俊郎

はじめに

東日本大震災から13年が経過した。13年前の震災発生時、私は社会教育主事として宮城県松島自然の家に勤務していた。白砂青松が広がる野蒜海岸の西端に位置し、その年は、開所40周年記念式典が行われた年であった。それにあわせるように自然の家本館もリニューアルされ、県民サービスのさらなる向上を目指して、新たな取り組みが行われようとしていた矢先の出来事であった。

津波の高さは6.8m。自然の家本館2階の天井ぎりぎりの高さであった。私は、本館屋上で命をつなぐことができた。命をつなぐことができた私にとって、残りの教員としての月日は、ここまで私を育ててくれた地域への恩返しの日々であると心に決めた。

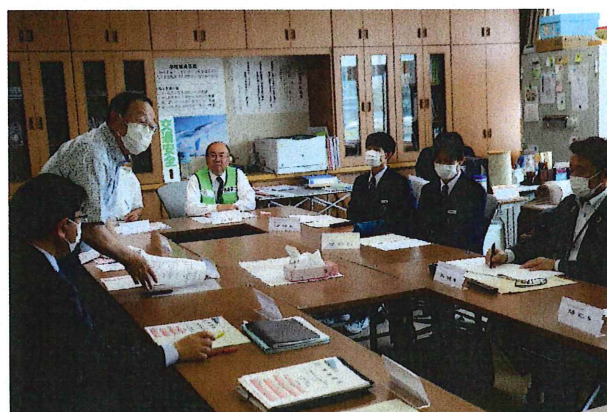
令和6年度で校長としての職務を終える。私の校長職としての月日の半分は「新型コロナウイルス感染拡大」との戦いであった。学校の伝統として大切にしてきたことや教育活動として受け継がれてきたことができなくなってしまったことも多い。人と人との繋がりを遮断し、直接のふれあいの機会を遠ざけた。震災後、震災からの教訓を大切にされて行われてきた防災教育も停滞したことは否めない。安全、安心な生活は、学校に限ったことではない。地域や家庭にとっても願いである。

現任校に赴任して以来、震災からの再出発の思いを忘れず、原点回帰の思いで校長としての安全、安心な学校づくり、地域づくりについて取り組んだ実践について以下に述べる。

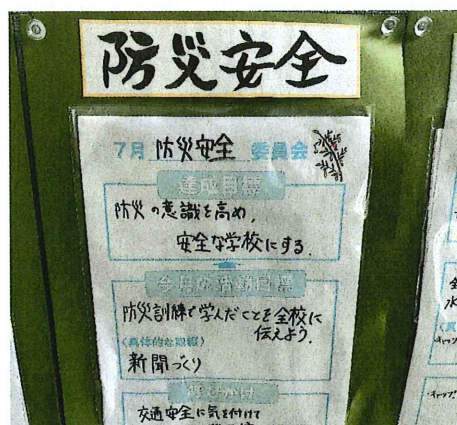
1 防災安全委員会の新設

今年度、生徒会の各種委員会の中に、防災安全委員会が新設された。生徒総会の決議を経て新設されたものである。以前まで東松島市は、6月に行われる市主催の総合防災訓練日は（6月3週目の日曜日）市内の学校を登校日としていた。生徒を総合防災訓練に積極的に参加させ、「自助」「公助」「共助」といった意識を育むことをねらいとしていた。しかしながら、後に市の施策が変わり、防災訓練の日は登校日とせず、地域

の一員として市の総合防災訓練に参加することになった。このことは、生徒が地域の方々との顔の見える関係づくりに効果がある反面、地域の自主防災組織の取組の内容に温度差があり、地区によって生徒が積極的に参画できる地域とそうでない地域の明暗がはっきりと分かれてしまうというデメリットがあることがわかった。コロナの感染拡大防止という期間が、このデメリットの部分をも拡大させてしまったことはいまでもない。



私は、コロナ禍でも、できる範囲で学校と生徒をベースとした総合防災訓練への参加の機会を探っていた。幸いなことに市の防災担当者は私が市教委に在籍していた際のからの知り合いということもあり、校長としての自分の考えを彼に示した。そして、総合防災訓練前に学校周辺の自主防災組織のリーダーとの事前打ち合わせを行うことができた。その打ち合わせに、意図的に生徒の代表者数名を参加させ、地域の方々の防災に対する思いや願いを「我が事として」受け止める機会を設けた。（1年目）それが、次年度の防災安全委員会の発足につながるようになった。（2年目）



(1) 1年目の実践

市の総合防災訓練実施日に「休日、部活動をするために生徒が在籍している中で災害が発生した」という想定で訓練を行った。当日は、CSの担当者であるS教諭が担当している陸上部員（約20名）が校庭で部活動を行う中での発災を想定した。部員は、校庭の安全な場所に避難し、点呼確認後に2次避難を行った。

その後、地域の方々が指定避難所である本校に避難し、1次避難後に、本校独自の3つの訓練を追加した。

一つ目は、「校内への垂直避難訓練」である。2つの自主防災組織のリーダーの方が先導し、本校舎3階の普通教室へと避難する。その際、生徒在籍時の発災を想定し、学校にいた生徒があらかじめ指定された地区ごとの避難教室まで地域の方々を案内、誘導する訓練である。生徒の中には、自ら声を上げて案内する生徒もいれば、避難誘導のルートを一方通行にするために矢印の表示を掲げて、進行方向を明確に示す生徒もいた。担当教師による事前指導のおかげもあって、参加された地域の方々からは、訓練を通してありがたい言葉を数多くいただいた。当然ながら、避難してきた地域の方々の中には、中学生もいて地域住民の一員として実際の家庭からの避難を学んだ生徒もいた。



二つめは「段ボールベットおよびテント作成訓練」である。生徒と市役所職員が中心となって、体育館内で段ボールベットや避難所用の簡易テント（4～5人用）の設営を行った。段ボールベットは、全てが段ボール製であるが、組み立ての手順と接合方法を学んでおく必要がある。避難所用簡易テントは、袋から取り出せば瞬時に骨組みが主張し、設置可能である。どちらかという、収納方法にある程度のスキルが必要になる。何事も実際に体験してみることが必要である。関連するが、震災後、本校の校庭の一角に非常用の防災倉庫が設置され、非常時の防災用品が収納されている。いざという時に備え、この防災倉庫の中に何がど

れくらい収納されているのかを本校職員や生徒は知っておくべきである。本校では、転入職員や新規採用職員を市の総合防災訓練時に意図的に学校参集のメンバーとして計画し、地域や学校を知る貴重な機会にしている。

三つめは「マンホールトイレ設置訓練」である。これは、最も難しく、はっきり言えば、生徒だけでは設置することは困難である。本校職員でも難しいであろう。だからこそ、平時に行われる訓練の際に、多くの大人と生徒がトイレ設置までの過程に関わることで、（目視することで）いざという時に役立つとともに、毎年、その場にいるだけで「持続可能な防災」に繋がると考えたのである。



(2) 2年目の実践

一つめは安全防災委員会の参画である。この委員会は前述したように生徒会組織の一つとして今年度設立された。活動内容は、今後生徒の企画や担当教師の提案や指導によって、様々な面で展開されることが予想されるが、今年度の大きな活動の1回目が市の総合防災訓練となった。昨年度は、意図的に一つの運動部がその役割を担ったが、今年度は当委員会のメンバーが行った。特筆すべきは、この委員会の委員を新規で募集したところ2、3年生の生徒の中には、昨年度陸上部員として市の総合防災訓練に参加し、地域の方々とともに活動したメンバーが数名含まれていたことである。私が当日段ボールベット作成の場面を確認しに行ったところ、昨年度以上にスムーズに段ボールベットが完成していたことに驚いた。「私、昨年度、陸上部として参加していました。」と語った生徒は、地域から参加した数名のご婦人を相手に、まるでテレビショッピングの商品説明のように、はきはきと段ボールベットの作成方法やその強度について実演を交えながら行っていたことが印象的である。



また、マンホールトイレの場面でも同様のことが起きていた。昨年度まではマンホールトイレが完成するまでが時間を要し、やっとのことで完成しても、生徒は大人の説明を聴くだけの単なる傍観者に過ぎなかった。しかしながら、今年は、地域から参加した若いお父さんたちと防災安全委員会の男子生徒の手によって昨年よりもスムーズに完成することができた。(地域の方々も生徒の参画の様子を見て、単なる参集型の訓練だけでは何か欠けていることに心を動かされたに違いない。)さらには、昔の井戸に使われていたような手押しポンプを使って、排水用の水をためる手順と、排泄後の下水の過程まで、生徒の手によって行うことができた。私も含めた昭和生まれにとっては、昔の井戸から水を汲み上げる体験をしたことはあるが、経験のない世代も多くなっていることに改めて気づかされた。防災安全委員会の生徒の表情は、とても明るく、活動そのものに充実感を感じているのがわかった。



避難解除及び防災訓練終了が告げられた後に、私はひとつの時間と場の設定を行った。本校には災害発生時及び本校が避難所開設となった際に真っ先に本校に駆けつける市の担当職員が4名いる。その4名の職員と安全防災委員会の生徒の接続の時間(顔合わせの時間)である。言い換えれば「顔の見える関係づくり」

である。災害発生時が、夜間や休日であれば、私も含めた本校教職員の学校到着には時間がかかることも考えられる。避難所開設時に、中学生も地域の大人や市職員と協力して大きな力になることは東日本大震災から得た宝物である。市職員の方々が当日の中学生の活躍の評価をしてくださった時の生徒の表情は、何ともいえないものであった。この半日の時間が、実際に学校がマネジメントした時間である。ちなみに、本校では、毎年、市の担当職員の「顔写真」&「氏名」を職員室および玄関に1年中掲示している。(当然のことであるが、本人の許可を取った上でやっている)こうすることによって、訓練当日に参加できなかった教職員及び生徒も「災害発生時、この人達が本校の担当職員である」という気構えに通じることが期待できる。キーワードは「つながりをつなぐ」こと。これからの学校が大切にしなければならないキーワードである。



2 学校の弱点を知り、改善・工夫する

一つ目は、今から3年前、私が現任校に着任してすぐに実践した防災備品の移動計画である。東日本大震災時の津波は、海岸線から数百メートル離れた本校にも押し寄せ、校舎1階の半分まで浸水した。今でも校舎内には津波到達の高さを示した表示がしっかりと掲示されている。私は、着任後に地域の方々から、「学校周辺の水はしばらく引かず、数日間避難所は孤立した」という話を何回か聞き、その原因の一つは学校周辺の地形の影響もあることを知った。校庭にある防災備品は災害発生時にすぐに役立つとは限らないと判断した私は、防災備品を分割保管すべきと考え、市の防災課と協議した上で、水や食料、最低限の生活用品を校舎2階の特別教室に移動した。特別教室の一角にあることで、スペースが狭くなるデメリットはあるが、日常的に生徒の目に触れるメリットも期待した。



二つめは、災害の非常持ち出し物をコンパクトにまとめたことである。火災や地震が発生した際に校内持ち出す最低限のものを職員玄関に集約した。全ての職員が揃っている時にだけ災害が発生するとは限らない。生徒や保護者の目にも触れる場所に明確にしておくだけで、生徒や保護者の防災意識の向上も図れると考えた。学校での気づきを家庭や地域に広めてほしいと思った。いざという時に、最低限の人数でも効率よく持ち出しが可能になるように工夫した。この実践は、後に市内の学校の防災の環境モデルになった。



上の写真のように ①内容物を写真で表現し常に可視化したこと、②下部には、前述した本校担当の市職員4名の顔写真も掲示したこと、③停電時を想定した際には、電子ハンディメガホンが情報伝達の鍵を握ると考え、最低でも各フロアに一機は設置できるだけの数をそろえ、共通理解のもとでの定められた場所に設置している。



おわりに

「生徒と地域の方々が互いに顔の見える関係を築くこと」は私の学校経営の土台の一つである。本校では、地域で行われる「祭り」や「地区行事」を生徒が地域と繋がる絶好の機会ととらえている。吹奏楽部への出演依頼をはじめ、出店の販売協力、ステージの進行依頼 (MC)、美術部には、祭りのポスター制作依頼や祭りに関する表示や装飾の依頼がある。中学生にとって地域の祭りは楽しみの一つ。祭りを楽しむだけでなく、大人の仕掛けによって生徒に「出番」をつくり、意図的な「役割」を付与し、その取組を地域の大人が、しっかりと「承認」(褒められる)されれば、生徒の自己有用感が高まることに繋がる。



「学校は地域に浮かぶ船」

コロナが人と人との繋がりを遮断した。それを回復させるきっかけの一つは、地域の「祭り」にあると考えた。キーワードは、「つながりをつなぐ」ということ。祭りに生まれた時間と空間は、自然と地域の方々と生徒を笑顔でつなぐ価値ある時間である。地域の方々と生徒がお互いに顔の見える関係になれば、もうそれは持続可能な社会に向けての基盤が形作られたことになるのではないかと私は考えている。

震災を語り継ぐ世代が震災を経験していない世代にどのように命のバトンをつないでいくか。私は、校長としてさらに学校を成長させるヒントを求め、自ら地域に足を運び、地域と学校をつなぐ役割を果たしていきたいと思う。

